VIEWPOINT
音楽

伊藤祐二（作曲家）
ユージ 斧に 気をつけろ

詩人が個人詩集を出版する、それはとても特別なことだと想像する。音楽家の場合は、コンサートが基本だろうけれど、それは一夜にして霞のように消え去る。「本」のように残るものとしては現状では、CD、最近復活したレコード、だろうか。

私の作品集CD「伊藤祐二作品集Ⅰ」ALCD-140、が四月七日に発売となった。（本稿で私は自分の宣伝的な内容を控えているが、今回は特別に。）

「作品集 Ⅰ」と題したように、古い作品も含め、全五曲を収録している。最も古い作品は、'77年の「振り返りⅠ」（Vn/Pf）。大学一年の夏季休業中に、実家の自室で作曲。この実家は戦前の建物で、私の部屋はもともと茶室として造られていた。当時（理解していたかはともかく）ブランショを読んでいた影響で、オルフェウスの振り返り、をタイトルに。この実家は、住み手を失い、昨年消失、更地の空間に言葉を失った……。

「ヴァシレ・モルドヴァンの7つの詩」（Sop/Pf,'02）。ルーマニアの俳人の句（ルーマニア語）に作曲した経緯は、解説に詳述。「月のいまだ見えざる顔」という、月に関する句集より七つの句を選んだ。

ただ一人／未だ白紙の紙に向き合う／背には月 // に始まり、それは機織り機／絹の湖を行き来する／月は杼 // 一輪の木春菊が／花びらを散らす／月は欠けゆく // 沈みゆく月／いったい何度／誰に見られることもなく //（伊藤訳）といった具合。美しい曲で、多くの方に愛されている。ブカレストでの初演では、モルドヴァンさんが涙を流して……。

そして三曲のピアノソロ作品が、このCDの基調を成す。ピアノは井上郷子。（ヴァイオリン、松岡麻衣子、ソプラノ、長島剛子）

多くの反響をいただいているのだが、あるデザイナーさんの「音楽が素晴らしくて、痺れました！　音の現代詩……のようです。」という率直な感想は、率直に嬉しかった。「音の現代詩のよう」という表現を私は気に入っていて、現代詩を読んでいるような感覚で私の音楽を聴いた、という意味に理解している。ところが、意地の悪い友人が、そうではなくて、「現代詩」「現代美術」、つまり「現代の、同時代の、おおむね存命の作家の生み出した作品空間」が、文学や美術に関しては、人々にその存在を認知されているが、音楽のそれは、認知されていない。だから、「現代詩のよう」と比喩されたのだ、と。

確かに、人々は書店で普通に同時代の作家の本を買う。休日には、画廊に知り合いの絵描きの絵を見に行く。しかし、作家や画家ほどには、「同時代を生きている作曲家」は、視界に入っていないかもしれない。

読者諸氏は如何？

雲の背後に隠れていた月が雲間から現れ、輝く瞬間／「表現」とは無縁の、すばらしく魅力的な現れの瞬間／曲の始めから終わりまで、現れるすべての音一つ一つが／そのような美しい現れとして聴こえるような音楽を夢想する（解説より）

これが私の作曲上の夢想だ。音楽の成り行きは、単に音楽的持続を成立させ、個々の音を存在させるための条件に過ぎない。あざとい作為は排除されているので、よく耳を澄ませていただきたい。一音に耳を澄ませる楽しみ（と洗練）。そこを存分に探求していただければと思う。

現代詩を読むように！

（メジャーなオンラインショップでポチっとできます。）